狂詩曲
ラプソディー
Rhapsody

Report
04

花の名前
リクリエーションの記録

花の名前

『邦子狂詩曲(ラプソディー)』の映像作家とドラマトゥルクを担う中瀬俊介さんに、再再演である『花の名前』クリエーションについて伺った。

『花の名前』は、向田邦子の短編集『思い出トランプ』所収の「花の名前」を原作としており、近年の中村蓉の代表作でもある。
これまで中村蓉は、原作のあるダンス作品を数多く作ってきた。松本清張、坂口安吾、シェイクスピアからヴァージニア・ウルフ、その中のひとつに向田の『阿修羅のごとく』も含まれる。『花の名前』は、そんな中村蓉の転換期となった作品である。
それまでの中村蓉の作品には、原作を物語として踊る、登場人物になりきる、といった演劇的手法が多く見られた。しかし『花の名前』以降、その手法は鳴りを潜める。同作は朗読が物語を補完してくれるからこそ、ダンサーは電話になり、家具になり、人以外の何かに憑依し始める。また内容の一節や言葉から連想されたイメージが、ダンスに置き換えられ、物語からは乖離したシーンが展開される。これは、これまで物語を踊ってきた中村蓉が、踊りが物語るイメージさえも原作は補完してくれると気づいた瞬間でもあった。　引用：芸劇BUZZ vol.48

今回の『花の名前』の出演者である福原冠さんは、実は幻の初演版に出る予定の役者さんであった。コロナの状況下で公演は中止となり、上演された初演版では長谷川暢さんが出演することとなる。

花の名前

初演版は朗読部分に録音を使った演出があったが、再演版では役者の永島敬三さんが加わり、朗読部分が生の声で行われた。
今回の再再演版では、長谷川さんと永島さんは出演しない。(長谷川さんは今回、演出協力という形で作品をサポートしている。) そのため福原さんは、長谷川さんの動きと、永島さんの声の役割を担うことになる。そんな福原さんの朗読をしながら、役者としても演じて、パフォーマーとして踊る姿が、これまでの作品と大きく異なる。
また当然のことながら、出演者が違えば中村蓉との創作においてのコミュニケーションが変わり、作品から見えてくる景色も変貌する。初演、再演を見ている方でも楽しめる、また新しい『花の名前』が生まれている。

ダブルビルとして意識していることは？

これは『花の名前』だけでなく『禍福はあざなえる縄のごとし』でも同じことが言えるが。ダブルビルであるという構成上、それぞれ別個の作品として成り立たせるのはもちろんのこと「なぜ、この2作品であるのか」「中村蓉が向田邦子を原作に作品を作るとは、どういうことか」を常に意識している。そのひとつのアンサーとして、公演を観ていただければ体験できるものになっている。

レポート担当　構成：緒方彩乃　写真：アラキミユ